

九州大学百年の宝物

九州大学百年の宝物刊行委員会

<https://hdl.handle.net/2324/1526202>

出版情報：2011-02-25. 丸善プラネット
バージョン：
権利関係：



KYUSHU UNIVERSITY

司礼監刊本『文献通考』—明の宮廷出版物—

『文献通考』(ブンケンツウコウとも)三四八巻は、宋末元初の歴史家、馬端臨(一一五四~一三三〇)編纂の政書である。「政書」とは、中国目録学上の用語であり、国家の諸制度(政治、経済、教育、文化等の各制度)について記載された書を指す。古代から宋の寧宗開禧三(一一〇七)年に至るまでの歴代諸制度についてまとめられた『文献通考』は、政書の代表的著作として知られている。唐・杜佑(七三五~八二二)編纂の『通典』、宋・鄭樵(一一〇四~一六二)編纂の『通志』とともに「三通」と並び称され、後代の政書編纂に与えた影響も大きい。

『文献通考』には、その名の通り様々な文献資料が引用されるとともに、歴代制度の変遷等について通時的考察が加えられている。引用文献の面では、特に唐の中期から宋に至る時期を中心として、各時期の制度を伝える文献の資料的価値が高く、また考察の面においても、制度運用上に現れた様々な現象を帰納的、包括的に捉えて古今に貫徹

する原理を探究しようと努めた点が、明清以来の史学者によつて高く評価されている。

本書は、早くは馬端臨の存命中に出版され、現在も数種の元版が伝存するほか、明代、清代においても陸續と出版され、多数の版本が存在する。その中で、中央図書館貴重書庫所蔵のものは、明の宮廷において出版された一本である。明の宮廷内において出版を担当した部署に司礼監管轄の経廠があり、そこで出版された書物を「司礼監刊本」あるいは「経廠本」と呼ぶが、九州大学所蔵の版本もまさしくこの司礼監刊本にあたり、嘉靖三(一五二四)年の刊である。

縦横三五・七×一二・四センチメートル(内匡郭・二四・八×一六・五センチメートル)の大冊(全百冊)であり、四周双边の匡郭、双黒魚尾、大黒口の版心を持つ堂々とした版面のうちに、半葉一〇行・行二〇字(小字双行)と、ゆつたりと行・字間が構えられ、字間あるいは文字の四隅に、句読点と



しての圈点や、多音字の読み分けを示す声点が附される。料紙は厚手の白綿紙であり、灰色の綾絹を用いて表紙、背表紙、裏表紙と一体的に包む装丁(包背装)は、明の宮廷にて出版された姿そのままの原装である。各冊には表紙の副題簽及び冊の冒頭に「廣運之宝」の朱文方形大印が捺されるほか、序末に「表章經史之宝」の大印が捺される。ともに明内廷の印である。このほか、各冊末尾に「掌院學士護軍統領」の印記が見られ、清朝においては、顯官に所蔵されていたことがわかる(その他六種の印記あり)。

本書は昭和一一年一一月一九日、二二五一円七七銭で購入されているが、後に編纂された『九州大學附属図書館漢籍目録』にも記載されず、従来注目されることがなかった。明代内府出版の姿を伝える貴重な資料であり、今後の更なる調査が待たれる。

(大渕 貴之)

参考文献



文心雕龍 龍

概要

受入日：一九五一年一月二十四日

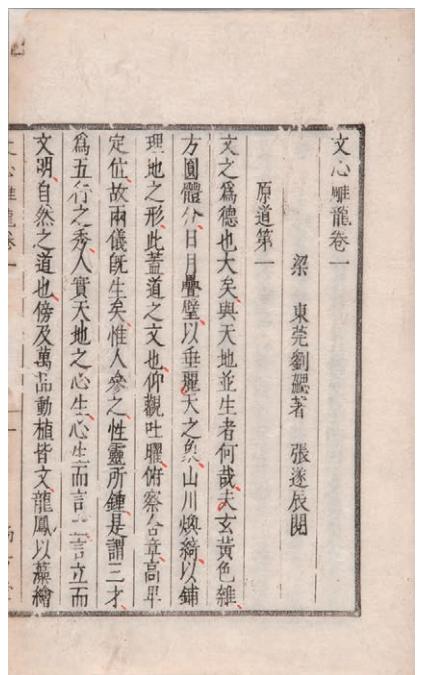
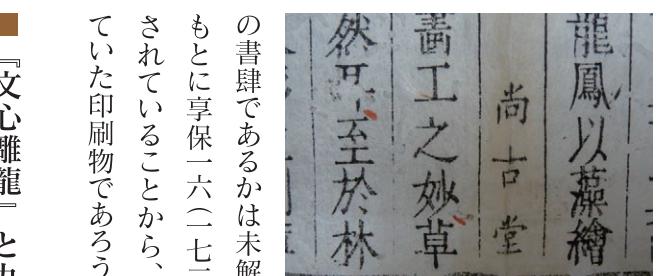
形態：和装本、上下二冊

所蔵場所：文系合同図書室貴重書庫

旧藏者：蔵書印は三種（新邨氏貯蔵記／高橋氏記／東海書樓）。朱墨による句読点と若干の字句校勘の書き入れがある。

中国の文学理論書『文心雕龍』

本書は全体で五〇篇に及ぶ体系的文学理論の書で、流麗な四六駢驪文を駆使した中国古典の一つである。著者劉勰（四六六？～五二二？）は、時の皇帝蕭衍（梁の武帝）の下で官職を得、やがて『文選』の編者として有名な皇太子蕭統（昭明太子）の側近として仕えた。その後、中国では文学を学ぶ者の必読の書として尊崇され、遣唐使の一員として唐の都長安に学んだ空海（七七四～八三五）も、その著作『文鏡秘府論』の中に引用が見られる。



尚古堂本『文心雕龍』書影

木活字印刷の書物は、そもそも発行部数も少なく、本書も極めて希少価値が高い。

貴重な江戸木活字本

九州大学所蔵の本書

は、中国の明時代に出版されたものを、我が国で木活字の技術によって再刊したものである。版心に刻まれた「尚古堂」がそれが京都・江戸のいすれの書肆であるかは未解明である。しかし、この本をもとに享保一六（一七三二）年に新たな版本が出版されていることから、一八世紀初頭には完成されていた印刷物であろう。

『文心雕龍』と九州大学

本書が購入された当時の中国文学研究室の主任教授は目加田誠（一九〇四～一九九四）であった。我が国でこの『文心雕龍』を初めて現代語訳す

なる研究書『文心雕龍索引』（一九五〇）がある。この古版本は、両氏の業績とともに九州大学の中国学研究の“学燈”を象徴する一書でもある。

（静永健）

参考文献

- 戸田浩暉訳注『文心雕龍』上・下、新穂漢文大系、明治書院、一九七四・一九七八
- 『目加田誠著作集』全八冊、龍溪書舎、一九八一～一九八六
- 岡村繁『文心雕龍索引』、広島文理科大学漢文学研究室、一九五〇
- 山口謙司監修『大東文化大学図書館所蔵戸田浩暉博士旧蔵書目録』二〇〇五年

濱文庫

概要

受入
一九八六年

数量・力三力点線一五〇〇冊

日藏者…賓一衛(九州大學教養)

三藏者，濱一衛（九州方略）黎養普黎拉

受力
經緯

中国演劇の研究者であつた濱一衛は、一九三四五年から二年間の北京留学中に、京劇をはじめとする当時の中国演劇の資料を収集した。帰国後も中国演劇に関する新聞・雑誌の切り抜きを続けるなど、生涯を通して特色あるコレクションを作り上げた。濱の没後、蔵書の中から漢籍と中国演劇関係の資料が一括して、九州大学附属図書館教養部分館に濱文庫として収められた。

蔵書の特色

濱文庫には、戯单（芝居番付、プログラム）、唱本

（演劇や語り物の歌詞を印刷した小冊子）、レコード（京劇などの唱を録音したもの）など演劇に関する生の資料が多く収蔵される。図書館の一般的な収集対象でないために散佚しやすいこれらの資料を含む濱文庫は、京劇全盛期である一九三〇年代の北京を中心とした中国演劇コレクションとしては国内有数のものである。ほかに、中国より伝来し江戸から明治期の日本で流行した明清樂の工尺譜（楽譜）や、『新刻校正買壳蒙古同文雜字』（清・嘉慶六「一八〇二」年、北京・錦文堂原刊本）と
いう中国語とモンゴル語の絵入り対訳語彙集など

も貴重である。濱一衛は北京留学中、北京大学教授で著名な文学者であつた周作人邸に下宿している。

■公開・発信

二〇〇九年五月の九州大学開学記念行事・第五〇回附属図書館貴重文物展示では、約八〇点の資料を展示して、濱文庫の全貌が紹介された。展示会の図録冊子に、「濱一衛と京劇展—濱文庫の中国演劇コレクション」(九州大学附属図書館、二



戲單

民国20(1931)年8月25日、北京・第一舞台での白天(昼興行)の戯单。中段に俳優名、下段に演目が記されている。濱文庫には1931~39年の戯单が計186枚所蔵されている。



唱本

演文庫に所蔵される清末から民国時代までの唱本計1053冊は、内外有数のコレクションである。俳優や芸人による庶民の文化を映し出す唱本は、俗字俗語が多用され、その研究はいまなお未開拓の分野である。

参考文献

(<http://hdl.handle.net/2324/14739>)

(中里見散

『濱文庫（中国戯劇関係資料）目録』、九州大学附属図書館教養

松浦恒雄「演文庫所蔵戯曲單劇目併優ディーラベース」、大阪市立大學大学院文学研究科重点研究・個別研究プロジェクト「二〇世紀中国演劇史における戯曲・特刊の基礎的研究」、二〇〇八中里見敬「演文庫所蔵戯曲单編年目録」「中国文学論集」三七、二〇〇八

中里見敬、山根泰志編「演文庫所蔵唱本目録稿(一)」「言語科学」四五、二〇〇〇



濱一衛(1909~1984)

大阪生まれ。京都帝大卒業後、北京に2年間留学。松山高商教授を経て、1949年九州大学教養部に着任した。根っからの芝居好きで、京劇の唱を歌うこともできたという。著書に『支那芝居の話』(1944; 2000復刊)、『日本芸能の源流』(1968)、翻訳に『琵琶記』(1959)、『拜月亭』(1970)等がある。

滋賀文庫

概要

本文庫は滋賀秀三氏（東京大学名誉教授）の蔵書である。滋賀氏は一九二二年生まれ、一九四三年に東京帝国大学法学部を卒業後大学院特別研究生に採用され、一九四八年に助教授、一九五九年に教授に昇進、一九八二年に定年退職するまで東京大学において東洋法制史の研究と教育に従事し、退職後は千葉大学教授、その後日本学士院会員として活躍した。著書に『中国家族法論』（弘文堂、一九五〇）、『中国家族法の原理』（創文社、一九六七、これにより日本学士院賞受賞）、『清代中国の法と裁判』（同、一九八四）、『中国法制史論集』（同、二〇〇三）、『統・清代中国の法と裁判』（遺著）（同、二〇〇九）があり、いずれも東洋法制史学のみならず広く法学・歴史学において避けて通ることの出来ない、巨大な射程を持つ業績として屹立している。

学法学会議院での受入が決定され、筆者が受入関連の作業を赤城氏とともに行つた。滋賀氏から直接の薰陶を受けることができた最も若い世代である赤城氏と筆者が整理作業に当たることになったのも思えば不思議な縁であるといえよう。

特色

東洋法制史学は勿論、関連するローマ・西洋・日本法制史に関する文献、さらには法学・歴史学一般に関する書籍がほぼ網羅されており、かつ滋賀氏が研究に使用した原史料・漢籍・ノート・ファイル類や抜刷等もある。国宝級の貴重書籍が含まれている訳ではないが、収書に品格すら感じられるバランスのとれたコレクションであるといえる。さらには滋賀氏の勤務校であつた東京大学法学部の図書館には氏の収集にかかる膨大な図書が所蔵されていることにも別途留意されたい。

公開

二〇〇九年五月に第一陣、二〇一〇年九月に第二陣の引越が行われ、その整理作業が鋭意進行中である。先行して書籍の整理を行い滋賀文庫として公開し、その他の資料群は滋賀秀三関係文書として別途公開する予定である。

（西英昭）



滋賀文庫中の漢籍史料

清朝時期の律例や刑案（裁判記録）等をはじめ、滋賀氏が研究の際に用いた史料が含まれている。



滋賀文庫架蔵状況

滋賀氏の書斎及び別棟書庫に保存されていた書籍。総量は段ボール箱170箱を超える規模であった。

参考文献

滋賀秀三「統・清代中国の法と裁判」（遺著）、創文社、二〇〇九
卷末の年譜及び著作目録を参照。

萩野文庫

概要

中央図書館所蔵萩野文庫は、東京帝国大学国史学教授萩野由之博士の旧蔵書である（約七五〇冊）。東大国史学出身の竹岡勝也法文学部助教授（当時）等の斡旋により、昭和四年から六年にかけて購入されたものである。なお、萩野の蔵書は、東京大学附属図書館、佐渡高等学校舟崎文庫にも所蔵されている。

■ 萩野由之について

萩野由之（一八六〇～一九二四、号は和菴）は、佐渡国相川に彫刻師の萩野咲藏の長男として生まれる。円山溟北の学古塾、修教館（佐渡の官学）、興亜会支那語学校に学び、東京帝国大学文学部古典講習科卒業後、元老院、貴族院に勤務した。学習院教授、東京高等師範兼東京女子高等師範両校教授を経て東京帝国大学文科大学教授に任せられ、退官した翌年の大正一三年、六五歳で没した。

■ 藏書の特色

萩野文庫は、国史学・国文学関係の書を中心とし、朝鮮本『杜律分韻』・『明州阿育王山志』等の漢籍も収めている。伝来に着目すると、国学者自筆・旧蔵の書が多数見受けられることが特徴である。特に小野高潔（一七四七～一八二九）の自筆本が多数収められており、その父高尚（一七二〇～一八〇〇）の自筆本（『南山翁隨筆』等）も含まれる。それ



『大鏡』

萩野文庫には『宝物集』・『今昔物語抄』等、通行本と異なる内容を持つ伝本が収められており、特に『大鏡』は萩野文庫本として学界に著名である。

萩野の著述は数多く、専門の国史学以外にも大きな業績を残しており、特に明治二三年から二五年にかけて小中村義象・落合直文とともに刊行した『日本文学全書』全二四巻は、国文学の復興と普及に大きな役割を果たした。また、萩野文庫中の自筆本にも、『記録異同考』のように、日記・記録研究上重要な稿本や、『諸藩学制書上』のように、現在原本を見ることができない貴重な写本が残されており、彼の見識の高さを窺うことができる。



はぎのよしゆき
萩野由之（『史学雑誌』35(2)より）

以外にも、『古今要覽稿』金玉部は屋代弘賢（一七八〇～一八四二）自筆であり、弘賢に関わる「不忍文庫」「阿波國文庫」や塙家に関わる「和学講談所」「温故堂文庫」の蔵書印が捺された書も多い。江戸時代以来の国学の伝統を継承し、その発展を目指した萩野の学問のありかたが反映されているといえるだろう。

■ 公開・発信

目録については、『萩野文庫目録』（一九三二）があり、附属図書館の蔵書検索システムでも検索可能である。『大鏡』・『水鏡』・古活字版『宇津保物語』については、全文画像を附属図書館の「日本古典籍画像データベース」から公開している。

（山根泰志）

参考文献

- 田保橋潔「評議員萩野博士の薨去」『史学雑誌』三五(2)、一九二九年二四
- 『九州大学新聞』二七、一九二九
- 揚原敏子「評伝 萩野由之」『学苑』三二五、一九六六年四(2)、一九六八
- ※本稿は、川添昭二氏の許可を得て、「附属図書館所蔵『萩野文庫』について」をもとにまとめたものである。

音無文庫

概要

受入日…昭和四年二月一五日～昭和六年二月
二五日

数量…一二〇二二冊(図書原簿による)

所蔵場所…中央図書館貴重書庫、保存書庫

旧蔵者…寺尾壽(東京大学名誉教授、元国立天文台所長)

受入経緯

明治・大正期にかけて、東京大学理学部教授、国立天文台所長などを歴任した寺尾壽氏の旧蔵書である。氏は福岡の生まれで、修猷館に学んだ。昭和三年六月二六日発行の「九州大学新聞」第一二号に、「抑々音無文庫は故博士が天文台長を辞職した後、伊豆伊東の音無川のほとりの閑居で暇にまかせてあらゆる方面に亘つて蒐集したもので……」という記事が掲載されている。この「音無川」が文庫命名の由来であろう。

た記載が見られることから、文中の伊東へ赴いた「九州帝大の図書館長」は第二代館長の長壽吉教授(法文学部)であると思われる。

蔵書の特色

氏自身の「あれだけあれば、国語国文学の研究は一通り出来るから」という言葉の通り、国語学・国文学に関する近世期の写本・板本が中心を占める。氏の専門であつた天文学関連の蔵書については、東京理科大学に「寺尾文庫」として所蔵されている。

音無文庫のうち、『宇津保物語』三〇冊は、文化三(一八〇六)年補刻の板本に江戸時代後期の国学者細井貞雄が書き入れを施したものである。この書き入れは恣意的な本文改変であるとして現



細井貞雄書入『宇津保物語』
菊宴巻。右の丁は細井貞雄手写の
料紙が綴じ込まれたものである。



『万水一露抄』

天正3(1575)年に連歌師の能登永闊によって著された『源氏物語』の注釈書。書写は江戸時代中期と見られる。

贋写版の『音無文庫書名目録』が備わる。『宇津保物語』等については、附属図書館研究開発室作成の「日本古典籍画像データベース」において公開されている。

公開・発信

参考文献

寺尾新『父乃書齋』、三省堂、一九四三

馬場鍊成『物理学史』、近代史のなかの理科学生、

中公新書ラクレ、一〇〇六

河野多麻『うつほ物語伝本の研究』、岩波書店、一九

七三

(田村 隆)



寺尾壽(1855~1923)
この肖像画は、氏にかつてフランス語を習ったという黒田清輝が明治42年に描いたものである。黒田記念館所蔵
(城野誠治氏撮影、画像提供元: 東京文化財研究所)。

概要

受入日・昭和二四年三月一九日、七月一三日
数量・七二三冊（図書原簿による）

所蔵場所・中央図書館貴重書庫

旧蔵者・宇土細川家

受入経緯

細川文庫は宇土細川家旧蔵の書物群である。宇土藩三万石は、肥後熊本藩五四万石の支藩。その蔵書は正保三（一六四六）年の分封以来、文事に熱心な初代藩主の行孝や六代興文、八代立之の室榮昌院（福子）等によって蒐集されたものであろう。

受入の経緯については、今井源衛氏が『学士会会報』七二六号（昭和五〇年一月）に、「この文庫は、九大図書館が昭和二四年三月に熊本市の古書店天野屋を介して、宇土細川家の蔵書七二三冊を一括購入したものである。……内容のすばらしいこともあつて、当時ほかに熊本大学、大阪大学から

も購入の希望が出たが、旧蔵者の、なるべく九州の地元にという希望があつて、結局九大に入った」と記している。

本藩の細川家の祖は古今伝授などで有名な細川幽斎で、家に伝わる蔵書群は永青文庫として知られ、その一部は熊本大学附属図書館に寄託されている。

蔵書の特色

文庫の概要是、「九州大学図書館蔵細川文庫目録」（『語文研究』八、昭和三四年二月）によつて窺うことができるが、大名家の旧蔵書にふさわしく

している。正元二（一一六〇）年二月二日の奥書きがあり、本書はその転写本と考えられる。

また、『うつほ物語』の絵巻は伝本が少なく、他に天理図書館（一本）や、九曜文庫、国文学研究資料館が所蔵するのみ。近世前期の書写で全五巻から成り、他の伝本と同様に俊陰巻のみの内容。万治三（一六六〇）年刊の絵入板本に基づいて製作された。高校生向けの教材『新国語要覧』（大修館書店）などにも細川文庫本が紹介されている。

尚、文書の類は「宇土細川家文書」として附属図書館付設記録資料館に所蔵されている。

公開・発信

『建礼門院右京大夫集』、『うつほ物語絵巻』等については、附属図書館研究開発室作成の「日本古典籍画像データベース」において公開されている。

（田村 隆）

参考文献

伝藤原為家筆『伊勢物語』
鎌倉時代の書写。本文は古本系統に属する。写真は初段の冒頭。



『建礼門院右京大夫集』
室町時代の書写。写真は家の序にあたる部分。



『うつほ物語絵巻』

主人公清原俊蔭の娘とその子仲忠の2人が「うつほ」（洞穴）の前で琴を演奏し、音色に感じ入った動物達が木の実を携えてやって来る場面。



細川行孝（1637～1690）
宇土藩の初代藩主。細川文庫には、「行孝公御十八歳御筆」と箱書にある承応2（1653）年書写の『詠歌大概』や、行孝とその母・室等の歌を集めた『葵花集』なども所蔵される。肖像は宇土市教育委員会所蔵。

支子文庫

概要

受入日…【和装本】昭和五四年九月二一〇日

【洋装本】同二月二九日

数量…九二四六冊(図書原簿による)

所蔵場所…中央図書館貴重書庫、保存書庫

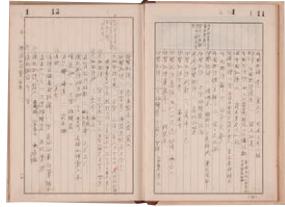
旧蔵者…田村専一郎(九州大学名誉教授)

受入経緯

九州大学教養部の教授であつた田村専一郎氏の旧蔵書。「くちなし」文庫と訓む。昭和五〇年八月二二日の「朝日新聞」朝刊に載つた訃報には、「好きな花は「くちなし」だったという。「ことば少なくして高潔である

こと」を理想にしていた」と紹介されている。

岡山の素封家出身で、大正一二年に東京帝国大学文学部を卒業後、同年一二月、旧制



自筆

藏書目録

国語学国文学第二講座の今井源衛教授と中野三敏助教授が中心となつて蔵書整理が行われた。その経緯は中野三敏『本道樂』(講談社、平成一五年)に詳しい。尚、支子文庫のうち浮世絵を中心とする美術関係の資料は、昭和四九年開館の北九州市立美術館(北九州市戸畠区)に受け入れられた。

蔵書の特色

特筆すべきは鎌倉時代末期の書写と見られる『大和物語』で、本書は氏の生前に本学に寄贈さ

れた後、昭和五三年に国の重要文化財に指定された。下巻のみの零本。正治二(一一〇〇)年八月一九日の奥書に、光阿弥陀仏が勝命(藤原親重)進上本を写したとあるが、本書はさらにその転写本と考えられる。昭和六年用の日記帳を用いた自筆の蔵書目録にも「鎌倉の比、六条家本か、流布本と異同多し」と記される通り、流布本の二条家本系統とは異なる六条家本系統の本文を持つ。

そのほか、『源氏物語歌絵』(巻子一軸、近世中期写)は『源氏物語』から春・夏・秋・冬・賀・祝の六つの場面を選んで描いた奈良絵に、梗概と物語中の和歌を添えたもの。梗概の内容は南北朝期に成立した『源氏物語』の梗概書『源氏小鏡』に近く、おそらくは『小鏡』の板本を参照しながら製作したのであろう。

氏の蔵書には、「支子」「支子文庫」「支子舎」「遙山房」「遙山麓舎」「遙青秘笈」などの蔵書印が捺されている。



『大和物語』
下巻冒頭の134段。「支子文庫」と「遙青秘笈」の蔵書印が見える。章段の番号が記された付箋は田村専一郎氏の筆跡。



『源氏物語歌絵』
若菜下巻の一場面(「賀」)。六条院の女楽と呼ばれる。
女君は右奥から女三宮・紫上・明石女御、手前は明石君。

公開・発信

『大和物語』、『源氏物語歌絵』、および奈良絵本や古活字版等については、附属図書館研究開発室作成の「日本古典籍画像データベース」において公開されている。

(田村 隆)

参考文献

九州大学国語国文学会志「故田村専一郎先生

旧蔵「支子文庫」報告」「語文研究」四三、一九

(下)」「文学研究」七四・七五、一九七七・一九七



田村専一郎
(1897~1975)
写真は穴山孝道、春日和男、重松泰雄、中村幸彦、福田良輔、森山隆一各氏と共に写った昭和43年の撮影かとされる。

近世後期戯作類コレクション

いわゆる“江戸文芸”の中で、特に“江戸戯作”と称するジャンルの位置付けは、特に戦後の近世文学史においては、庶民文芸、或いは市民の文學などの言表の許に極めて高く評価され、前期上方の西鶴・近松などに続いて、京伝・馬琴・三馬・一九など、一時は江戸時代を代表する文芸として一般に認知されてきた所であつた。

その後、中村幸彦氏などによる精緻な研究が進み、江戸後期戯作の中でも、更に寛政期を境として前期・後期の二段階に分けることが提唱され、各にその作者や読者層、更にはそれぞれの性格などを規定して、前期の知識性・高踏性、後期の庶民性・通俗性といった属性までが正確に把握されるようになり、一般的には後期のそれを以て中心とするようになって考えられるのが常であつたように思う。

そのような流れの中で、約100部、300冊に及ぶコレクションは、明らかに、余り研究の

あたりが有難い。

咲本の二〇部はその内の六部までが極初期の稀本であると共に、残り全部が凡て漢文笑話である辺りも、狂詩の五〇部と合わせて、このジャンルにおける知識層の作者の存在の大きさを示

している。

滑稽本は中本・小本を中心に後期のそれに集中するが、中で身振り芸の種本である、京伝・京山兄弟の『腹筋逢夢石』が四篇まで揃っているのは珍しい。

何れにせよ戯作モノは板種・板式の違いが極めて複雑なもの故、その究明には現物による比較検討が絶対必要な領域であり、そのためにはこうしたコレクションの意図的な拡大を図る以外に手段はない。

讀本類の数の少なさは、次項の「讀本コレクション」によつてその若干を補い得るものとなつてゐる。

(中野三敏)



『腹筋逢夢石』2編 京伝 作
身振り芸の種本として作られる。



『建豪余話』 延享元年刊
白話風漢文戯作の稀本。



『千代襄姫七変化物語』振鷺亭 作
蹄斎北馬の挿絵が巧緻を極めている。

進展していない前期戯作に焦点をあてた集書がなされており、極めて特徴的である。その範囲は洒落本（約70部）・滑稽本（約50部）・咲本（約20部）・讀本（約100部）・狂詩（約50部）の五類に及んで、従来の九州地区におけるこの類の集書の決定的な貧弱さを辛うじて補い得るものとなつてゐる辺りに第一の意義を見出し得るものである。

但し、このジャンルの書籍数は、恐らく十万部を楽に超すほどに膨大であり、本コレクションの如きは猶九牛の一毛とも言えようが、従来の集書に加えるに、今後の拡大を図る核としてふさわしいものと言えよう。中で一、二の稀本を紹介する。

一に洒落本中の『建豪余話』は従来堺屋利平板の一本のみが判明していたが、本コレクションの一本を得て現存二本となり、しかも今回の一一本は浅野弥兵衛の求板本であることが明らかで、このような伝存希少本にもなお求板本のあることが判

讀本コレクション

先掲の「近世後期戯作類コレクション」を補うものとして、本コレクションの意義は極めて大きい。

江戸期の散文文芸の主流は、前期（元禄前後）の西鶴や八文字屋本を中心とする浮世草子と、後期（寛政以降）の京伝・馬琴に代表される讀本とであることは言を俟たぬが、その讀本類に当たるものの極めて特徴的な集書がここにある。全二〇九部・七三四冊に及ぶ本コレクションの特徴とする所は、享保期に始まる京都の増穂残口と江戸の佚齋樗山という二大作者の著作を網羅する所から始めて、寛政期までの前期戯作界に広がる『談義』本や、『奇談』と称する初期讀本の諸作を、かなり意図的に丹念に集めてある所にある。

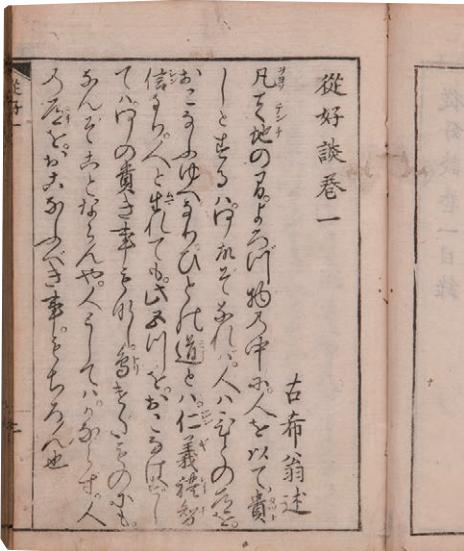
一方で寛政以降の完成期に当たる諸作も、京伝・馬琴・振鷺亭といった代表作者にも十分配慮されたものとなつてはいるが、この類は從来からよく調査研究の進んでいる分野であり、それに比べて談義本や奇談モノに関しては、極く近年に至つて

漸く研究の俎上に乗りつつある分野であり、その意味でも貴重である。

中でも岩田翁の『従好談』（享保一四年刊）や井沢蟠龍子の『雜々拾遺』（享保頃）、輝雄の『耽躉私記』（明和八年刊）、甘涎齋の『本心開悟一鉄炮』（天明四年刊）などは、本コレクションを以て初めて知り得るものであり、また残口批判の『一座物語』や樗山の『遊会錄』（写本）なども、從来全く触れられることのなかつた資料であるようだ。

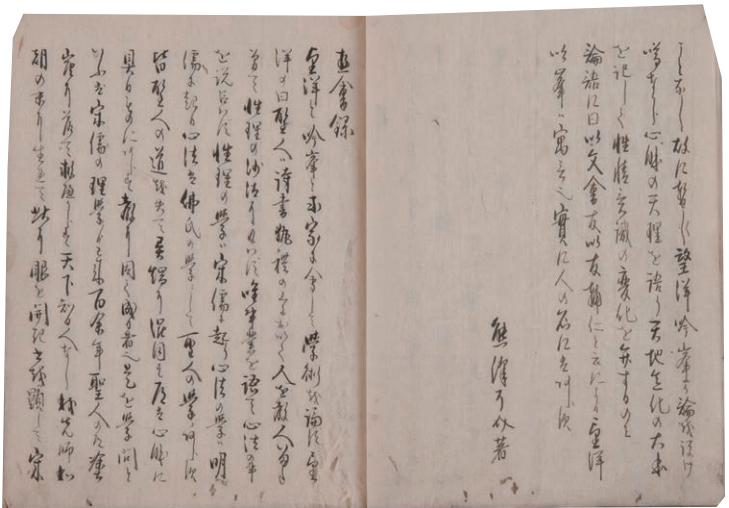
何れにせよ、本コレクションの精査によつて、從來の讀本研究は、その初期の姿の解明を大きく進展させることは確実である。

（中野三敏）



『従好談』

これ迄の著作年表類に全く見られない新出本で、樗山との関わりなどが予測される。



『遊会錄』

熊沢蕃山の名を借りているが、明らかに佚斎樗山の作品であり、樗山と蕃山の思想の近縁性が読みとれる。

近世木活字本コレクション

江戸の出版事業は室町末から寛永期まで、キリシタン版（グーテンベルク方式）と朝鮮版に基づく活字印刷の書物によつて始まつた。それ等を今、古活字版と称して、その文化史的意義は特筆されるべきものがある。その後寛永頃から、営業としての出版業が定着すると、経済原則に則つて、再印・重印の自由な整版様式（いわゆる木版本）にその座を譲り、以後幕末・明治まで、整版が中心となるが、寛政を過ぎる頃から再度、私家版として木活字による出版が復活し始め、かなりな流行を見る。それを古活字と区別して“近世木活”と称する。

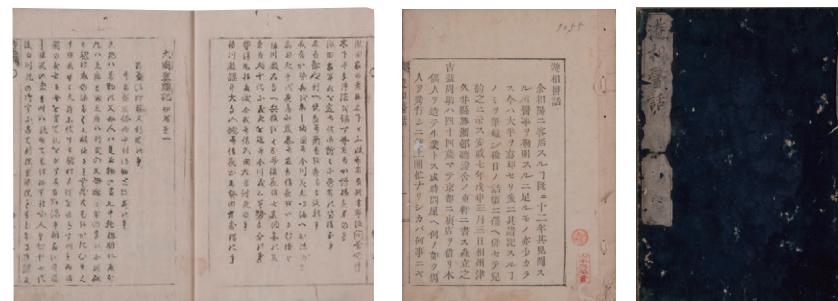
近世木活の特徴は、活字さえ作れば誰にでもできる手軽な出版であること、大方少部数（中には限定十部と記されたものもある）であること、異植字版による異版が多いこと、営業品ではないために所謂出版条例（享保七年施行）の適用を受けないことを理由に、内容的にもかなり自由

は通俗的なものだが、板式や活字は明らかにキリシタン版のそれを模した平仮名活字を用いているのは、豊太閤の時代に合わせた趣向の一つかと思われて面白い。森鷗外の「渋江抽斎」の中で、その奇行を記された儒医森立之と約之親子の『遊相医



『海国兵談』2種

それぞれ異植字版として刊行されている。



『太閤真顕記』

キリシタン版の字体を模した活字。

話』と『周尺説』の二書は、いずれも聯腋書院版と称された精美な活字によつて印刷された好ましい小冊となつてゐる。その他凡て伝存の少ない稀本が多い。

れんえき
（中野三敏）

な表現ができることなどがあげられる。前三条は近世木活の伝本そのものが、いずれも稀少価値を持つことの理由であり、後一条は自己規制を余さなくなっていた出版物の中で、幕政に関わる内容なども比較的自由に表現できた理由である。例えば林子平の『海国兵談』など、その初版は整版の私家版として刊行されて絶版処分を受け、子平自身も禁固されて没するに至るが、その後、全く同内容の書物が、木活字で四度に渡つて刊行流布され（本コレクションにもその内の二部がある）、全く咎められることはなかつたことなどがあげられよう。

本コレクションは二七一部、一〇〇〇冊に及ぶが、恐らく現存近世木活字本の総数は一二〇〇部ほどと思われる中で、その四分の一に当たる数となつてゐる。中には前述した『海国兵談』二種や、『東坡策』・『日本政記』などはいずれも六種に及ぶ異植字版が揃い、又、『太閤真顕記』一〇冊は、内容

雅俗文庫

■受人経緯

本文庫は、江戸文学・書誌学研究の第一人者として今も第一線で活躍する、中野三敏九州大学名誉教授（一九三五～）が蒐集した江戸期和装本を中心とするコレクション。平成二二年度、漢詩文や絵本を中心とする約六〇〇点（約一〇〇〇冊）が購入された。今後も隨筆・国字解物・通俗物・邦人経書・幸田露伴物・法帖類など、膨大な分量が寄贈される予定という。

■蔵書の特色

本文庫名は、中野氏が多年主張し、氏の江戸文化観のキーワードともなっている「雅俗」という名称が用いられている。簡単に言えば、雅とは伝統文化で、和歌・漢詩・擬古文の類、俗とは新興文化で、俳諧・川柳・小説の類。これまで往々にして、江戸文学と言えば後者の方ばかりが注目されてきたが、氏は、雅俗両文化はそれぞれの重みを持つて



澤田東江自筆『傾蓋集』(1764年写)

大本1冊。筆者ははじめ儒者を志し、後に「東江流」の書風で世に鳴った書家。宝暦14(1764)年の朝鮮通信使の来日に際し、一行の宿所であった品川東海寺を訪れ、朝鮮文官たちと交わした漢詩や筆談の内容が書き留められている。筆談ではやはり書家らしく、書や篆刻について質問することが多い。



秀国編・勝間龍水画『山の幸』(1765年刊)

大本1冊。同じ編者・画者による『海の幸』(1762年刊)の続編。稻穀イナゴ、蘭とカマキリなど、植物と昆虫・小動物を対置し、それにちなんだ発句を並べた多色刷絵俳書。特に稀本として名高い。写真は「けいとう(鶏頭)」「びくだみ」と「はたはた(精靈飛蝗)」。



津軽信寿編『独楽徒然集』(1731年頃刊)

大本1冊。津軽藩第5代藩主・信寿(号竹翁)が、自らの退隠を祝し、自作および嫡子・家臣ら作の詩歌・発句に、「破笠細工」で有名な小川破笠、英一蜂・宗理・栄羽などの絵を配して刊行した私家版。本文庫本は改装表紙、「享保詩歌発句絵」と墨書きされる。チエンバレン旧蔵。

参考文献

※現在本文庫の目録はないが、中野氏のコレクションを考える上では、次の文献・著作が参考になる。

中野三敏「蔵書目その一(～その十三)」「文献探求」一～二二、一

九七七～一九八八

同「書誌学談義 江戸の板本」、岩波書店、一九九五

同「和本の海へ—豊饒の江戸文化—」、角川選書、二〇〇九

※氏の蒐集された漢詩文集の大半(二五三七点)は、先に福岡大学にまとまって入っており、ウェブサイトからその目録および各資料の画像が閲覧できる。

福岡大学「江戸・明治漢詩文コレクション」

<http://dc.lib.fukuoka-u.ac.jp/kanshibun/index.html> 参照。

共存していたとし、それらが融合した状態こそが江戸文化の神髄と考える。本文庫の内容も、当然ながらそのような氏の江戸文化観が反映されたものとなつており、雅俗双方にわたる広範なジャンルの文献が蒐集されている。

特に江戸文学の屋台骨といつてもよい漢詩文集、雅俗融和のさまが視覚的に感得される画譜類、江戸文化の限々が知られる雑書類――「雑」であるがゆえに、これまで文学の側からも歴史の側からも取り上げられなかつた――などは、他コレクションにはあまり見られないもので、稀本・珍本が多い。また書誌学者でもある氏のコレクションらしく、書誌的に面白い本が多いのも本文庫の特色であろう。

■公開・発信

現在、目録作成のため調査・整理中。順次公開していく予定である。

(川平敏文)

吉村家文庫

—幕末陽明学者の貴重な原資料—

「吉村家文庫」は、幕末の陽明学者である吉村秋陽（名は晋、一七九七～一八六六）から斐山（名は駿、一八二一～一八八二）、白斎（名は彰、一八五三～一九〇八）と続く三代の人々の草稿・書簡・日記や写本類、約三五〇点によつて成つている。

吉村秋陽は安芸三原藩士の家に生まれ、始め古義学を学び、京都の伊藤東里の門に入る。郷里に帰つた後、菅茶山らと交流し、やがて程朱学を信奉するに至る。その後、江戸に出て佐藤一斎に従学するに及んで、陽明学に開眼し、篤くこれを信奉する。帰国して家塾を開き、多くの子弟を教える。藩の教授となり藩政機務にも参画する。

時代は攘夷か開国か、勤王か佐幕かと揺れ動く社会であつたが、秋陽は着実な涵養と実践を重んじた。陽明学を奉じたが、過激な方向には傾かず、朱王折衷的傾向にあつた。従つて、林良斎、春日潛庵、池田草庵らの陽明学者に限らず、大橋訥庵、楠本端山、楠本碩水といった朱子学者とも深い交流

や論争を行つた。

「吉村家文庫」には、彼の代表作である『格致贋議』、『王学提綱』、『読我書樓文草』などの草稿類や、『読我書樓長曆』などの日記類が収められており、幕末陽明学者の学問世界と文遊関係のみならず、激動の時代を生きた知識人の証言を読み取ることができる貴重な原資料群と言える。

本文庫は、九州大学文学部出身の荒木龍太郎氏が吉村秋陽関係資料の調査を行う中で、当主吉村寛氏から九州大学文学部への資料寄贈の申し出がなされ、昭和六〇（一九八五）年に実現したも

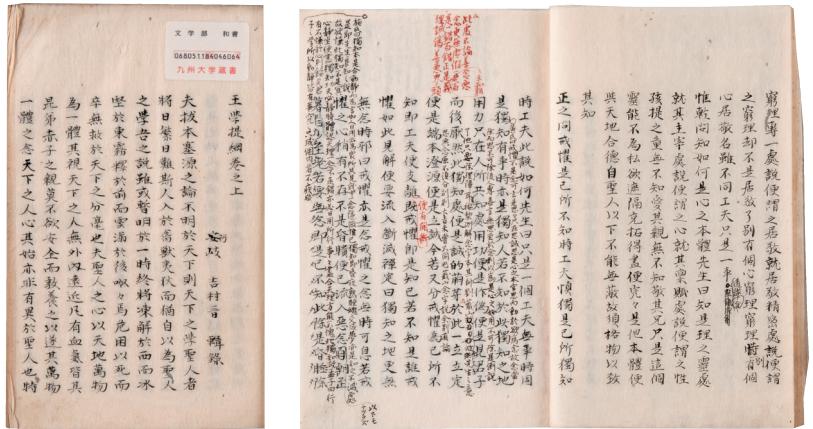
のである。その後、吉村家所蔵の掛軸類（書画、拓本）なども寄贈され、現在整理が行わされている。

荒木氏による『九州大学文学部所蔵 吉村家文庫目録』がある。

（柴田篤）

参考文献

荒木龍太郎・荒木見悟『吉村秋陽・東沢鴻』、『叢書・日本の思想家』四六、明徳出版社、一九八二



『王学提綱』2巻2冊 自筆草稿

王陽明の文集や『伝習録』から定論を収録し、適宜注釈を加えたもので、秋陽晩年の代表作。本冊は最初の自筆草稿であり、多くの加筆修訂が見られる。修訂後の「初稿」、「淨写」本も含め、本書の成立過程と彼の思想を考察する上で極めて重要な資料と言える。



『読我書樓長曆』32冊 自筆

吉村秋陽の日記。文政12年（1829年、33歳）から慶応2年（1866年、70歳）に至るまでのもので、部分的に欠けるところもあるが、激動の時代の貴重な記録と言える。



吉村秋陽肖像画

吉村家旧蔵の「定恪先生肖像」（部分）で、明治16年の東正純の画賛が付されている。東正純（1832～1891）は号を沢鴻といい、周防出身の陽明学者で、吉村秋陽の門人であった。

「書物の敵は人間である」

書物を作ったのが人間ならば、書物を滅ぼすのも人間である。隋の牛弘は、図書の五厄として始皇帝の焚書と漢魏六朝の四大政乱を挙げる。これは後に、明・胡応麟の続五厄、民国祝文白の続続五厄となつて続々追加される。中には唐の安史の乱、宋の靖康の変、明清鼎革時の動乱等が含まれる。筆者は更に現代の文化大革命や日本の関東大震災も書厄に加えたい。いずれも動乱や火災（地震に伴う）によつて生じた、つまりは人間が主因となつて惹き起こした書物の大規模な厄災である。

また近代のブレイズはその著『書物の敵』において、火や水、紙魚等と共に、「無知」や製本屋、蒐集家、召使や子供等を書物の敵に挙げる。いずれも書物の価値について無知か、もしくは偏見による図書への冒瀆である。

「物は稀なるを以て貴しと為す」、宋本や明本は当初は相当数が印刷されたが、今日では稀観書である。グーテンベルクの印刷書やその後のインキュナブラ本、更には島原で印刷されたキリンタン本もまた然りである。

図書館は多種多様の図書を多数所蔵する。蔵本には貴重書もあれば、一般書も含まれる。貴重書も初出時には一般書であつた。現在の一般書も五百年後には貴重書になる。願わくは、図書館における図書管理の「無知」によって、図書館自身が「書物の敵」とならないことを。

（竹村
則行）



ひどい虫食いによって閲覧ができなくなった古書籍。